総評　2021.4月分　杉本真維子

今月の佳作からいくつか紹介します。
「雨音の夜にこの身を沈めては／石だったころを思い出してる」（ベロニカ）神奈川県
「家族たち／寝静まってる／丑三つどき／鯛のあら煮と／一人の時間と」（加藤美紀）愛知県
この二作において中心となるものは「石」や「鯛のあら煮」というよりも〝時間〟なのでしょう。どちらも優れたおのれの身体性によって、見えない時間のすがたを浮き彫りにしています。

「大学の裏門が好きだったな／気取ってなくて／半透明な瓶の中にいるみたいで」（まちりこ）埼玉県
正門と違い、きつい視線に晒されない裏門のしんとした雰囲気がよく伝わってきます。「半透明な瓶の中」という表現が合うとは意外でした。門に限らず、裏側というもの本質を突いているように思います。

「口笛で／少し待とうか布袋葵の／ある駅は／バスの裏口開けた事ない」（水越晴子）三重県
たしかに後方の扉を閉め切りにしているバスは妙に印象に残ります。その車体に独特のふくらみを持つからでしょうか。その未知のふくらみと布袋葵の出あいがなぜかしっくりときます。

「今日出逢った鶺鴒と／不可分／昨日出逢った鶺鴒と」（降旗沃）東京都
視覚詩（ヴィジュアルポエム）とまではいいませんが、読むというより、眺める詩でしょうか。言葉が意味ではなくオブジェとしての役割を担って画面や紙の上に置かれているようで面白いです。

「指しおり　駱駝が春を濡らしたら」（大橋弘典）群馬県
はっきりとした意味はわかりませんが、頁の上の汗ばんだ指が、よだれを垂らした駱駝のすがたとユーモラスに重なってくるようです。自由を感じました。春についてのイメージが一つ増えた気がします。

「咳が出る　　手が遠くにある」（青木雅）埼玉県
ひょっとして、決して落としてはいけない大きな荷物を抱えているときにマスクをし忘れていることに気付き、かつ、いまにも咳が出そう、いう「危機的」な状況でしょうか。コロナ禍のいまを思わせます。

今月も丁寧に磨き込まれた作品に多く出会いました。来月もお待ちしています。